

庭園を楽しむために

弘前の大石武学流庭園のオイコノミア

佐々木 史雄*・佐々木 隆**

How to understand the gardens

Oikonomia of the Ouisibugaku school garden in Hirosaki

Fumio SASAKI, Takashi SASAKI

Key words : オイコノミア Oikonomia
大石武学流庭園 Ouisibugaku school garden
家 house
花 flower

はじめに

庭または庭園¹を享受し良く生きるための方法をオイコノミアと呼ぶのは、家政学や経済学を意味する economy (eco+nomy) の語源であるオイコノミア (οικονομία、οικο (家) + νομία (法・秩序・学))² というギリシア語へ戻して、衣食住の物や経済という実用的なものとするだけではなく、芸術学、教育学、人間学などの意味を含むより広く総合的に考察し、生活を豊かにするためである³。オイコス oikos とは核家族という

一つの家だけではなく氏族の共同体も含む広い概念でもあったので、家政学は家から共同体や君主や国家の経済を対象とする経済学へと発展していったことも納得のゆくものである。ここでは庭を造ることに共同した地域の共同体が良く生きることについても考える。⁴

オイコノミアの基本的な対象は自然や社会的要素を含む環境の中で営まれる日常の家庭生活である。家庭とは何か。パーソンズによれば家族の基本機能とは「慰安(精神の安定)

究助成金によって衣食住の総合である茶道の研究を行った。吉野裕子の日本の自然観には陰陽五行説の影響があるという説に基づいて、陰陽五行に基づく自然観によって、茶の湯の世界が形成されたことを示し、禅の思想だけではなくキリスト教とのかわりなどもあることを明らかにした。泉・『茶の湯とシンボル』南窓社 1998 年、佐々木・茶道誌『淡交』淡交社 1999 年「茶の湯のイコノロジー」12 回連載 『風水で読み解く弘前』北方新社 2001 年

⁴ そのような広い意味の用例はキリスト教では、神からの人間や自然への能動的な働きかけとして経綸という言葉が使われるが、これも原語はオイコノミアという言葉である。今日的に考えれば、神の働きの現われの結果を、自然法則を含む生態学 (ecology → eco+logy) 的秩序として理解できるのではないだろうか。キリスト教ではこのような規範性を自然法と呼ぶ。仏教でいう修善奉行・諸悪莫作のような教えも自然法に含まれる。

* 彫刻家

** 東北女子大学 (非常勤)

¹ 日本で「庭園」ということばが使われるようになるのは、西洋文明が入ってきた明治 40 年 (1907) ごろからで、garden の訳語としてであり、その歴史は浅い。庭園の「庭」という字は、元来中国においては堂前の場所、つまり屋前の平坦(へいたん)な場所をさしたから、日本に伝わったとき、一木一草一石もない広場(祭政を行う場所)を『日本書紀』では「庭(てい)」、『古事記』では「遷波(には)」「二八(には)」といったが、これは後世のいわゆる庭園ではなかった。[重森完途] 日本大百科全書

<https://bit.ly/3s9aAqn>

² 家政学をホーム・エコノミクスと呼ぶことは、語源的には家・家政学ということで、疊語になる。

³ 筆者の佐々木隆は泉滋三郎氏との共同で、科学研

と子供の社会化（教育）」⁵とされている。家と庭は家族の出会いの場となり、家族の基本機能である慰安と教育の活動を果たす場でもあるのである。

ここでは家庭という言葉から考察を始めた。家庭という熟語は家と庭という文字の複合されたものとして把握されていることを示すものである。複合された言葉で表現されることには意味があると思われる⁶。

庭は家または屋敷とかかわるものである。家で暮らす人々が風土や環境に合わせて建物としての家を建設し、その家の敷地の中に建物と調和させるように庭が造られる。家はそこに住む人の衣食住だけではなく家族生活を快適にし、それを守るものである。庭は憩いを与えるものである。

日本を代表する建造物である桂離宮は、離宮であるが、屋敷と庭園が調和されて美しく作られ、優雅な快適さ、心地よさを与えてくれるものとしている。



桂離宮⁷ 写真の向かって左側に橋がある

庭園芸術という言葉はヘーゲルも使っているが、その『美学』では詩や音楽や絵画や建築や彫刻の章を立て論じても、それらと同列に扱う庭園という章は立てられていない。西欧人らが庭を造らなかったわけではなく、フランス式の幾何学的に整然と整えられたヴェルサイユ宮殿には広大な庭園⁸があり、またイギリス式の自然の風景を活かした庭園もあった。ヘーゲルはそれらについて知っていた。それにもかかわらず、ほんのわずかしか論じていない⁹。これはヘーゲルの美学では、美学の対象を自然の自然美ではなく人間の技術が作り出した芸術美を美としているので、自然環境に依存し自然と何らかの折り合いを付けざるを得ない庭園について評価が低くなったのであろう。西洋絵画では風景画が描かれるようになるのは近世からで、東洋と比べると

⁵ 家族というものに機能が内在しているのではなく、家族を形成し営む中で、二つの機能を実現し、また、それによって家族が支えられてゆくのである。パーソンズに従えば、夫婦、子供が生まれ家族となり、子供が成長し独立して家にいなくなれば、また夫婦に戻り核家族の機能は役目を終えたのである。そして一族という拡大家族へと変わってゆくのである。一般に、家族の機能は、社会で家族がはたす働きのこと。社会の変化で、家族の役割も変化する。例えば、①愛情と欲求の満足②出産と育児③生産活動④消費活動⑤衣食住の協同⑥病人や老人の看護⑦冠婚葬祭の宗教行事⑧娯楽⑨心的安定などがある。パーソンズはそれらの相互作用を配慮しまとめたものとする。タルコッタ・パーソンズ、他『家族』(Family, Socialization and Interaction)

⁶ 英語の home や family は複合語ではない。house は家屋という物的な意味が多く、home は故郷という人的・精神的な意味が多い。home と family はほぼ同じような意味である。family は人的なものである。household は house と hold の複合語ではあるが house は家屋のことであり hold は家に所属し所有する意味で、household は家に家族を含めて保持されているものすべての意味である。しかし、庭が含まれるとしても、そこには庭という意味が特にあらわされているわけではない。

⁷ <https://garden-guide.jp/spot.php?i=katsurarikyuu> 桂離宮は日本を代表する庭園であるが、本稿で考察する津軽地方の厳しい自然の中で生まれた大石武学流の庭園の持つ野趣のようなものと比べるといかに都の洗練された優雅な文化を代表するものである。比較すると武学の武は武骨に通じ、学は岳と楽に通じているのではないかと思われる。

⁸ マリー・アントワネットの小トリアノン宮殿は田園風の風景を作って建てられている。大きな庭の中に建物を立てているように見える。ヴェルサイユ宮殿（大トリアノン宮殿）と対になっているので、フランスでも幾何学的な整合性のある庭がすべてではないことは明らかであろう。 <https://bit.ly/3qpZfRR>

⁹ ヘーゲル『美学第三巻の上』竹内敏雄訳 岩波書店1981年 「一体、庭園は本来ただ爽快な環境たるべきものであり、それ自身として独立の価値を要求せず、人間を人間性や内面性から乖離させようとし、単なる環境でなければならぬ。」そしてフランス式庭園について「自然そのものを戸外の広やかな住居と化せしめるのである」p 1597

庭園を楽しむために
弘前の大石武学流庭園のオイコノミア

遅いこととも関連があるように思われる。ヘーゲルは庭園を建築よりも絵画に近いものと考えている¹⁰。それに対して、東洋では山水画において山岳は古くから崇敬の対象であった。それが龍安寺の石庭や大徳寺の大仙院書院庭園など岩を島や山岳に見立てることへとつながっているように思われる。それは楽しみのための慰安というよりも心の浄化や精神の修養のために眺め、瞑想されたと思われる。



龍安寺の石庭¹¹ 庭の中に橋がない



大仙院 枯山水庭園¹² 中央に橋がある。

¹⁰ ヘーゲル『美学』同上「本来の意味での庭園芸術についてわれわれはその絵画的様式を建築的様式からきっぱり区別しなければならぬ。」ヘーゲルの美学は自然美を含めた美一般ではなく、人間の作りだす美の芸術学というべきものであろう。日本庭園において、座観式庭園は視点を固定することになり絵画的鑑賞方法に通じるかもしれない。回遊式庭園は庭の造作物の周りを歩くので建築や彫刻に近づくことになるであろう。しかし、座観式でも廊下や部屋の中を移動するときに庭の姿は変わり、回遊式でも庭の亭で眺める時は庭の姿は絵のように固定されることになる。

¹¹ <https://bit.ly/3eKailK> 桂離宮との共通性はなだらかな平面が基盤となっている。石の向きや配置が重要な要素となっている。縁側で見ることになっているが、江戸時代の絵図に町人が石庭の中に入って見物している絵がある。龍安寺の石庭と他の庭園との大きな違いに橋がないということである。石庭の石が虎の子渡しというように白い砂が海や河に喩えられるのは橋がないからであろう。

日本には神道と仏教の習合された山伏などの山岳信仰も行われてきた。それに対して西洋では山岳の姿を恐ろしく不気味なものにとらえ、崇高としてとらえるのは18世紀頃からと言われる。畏怖の念という言葉があるが、恐怖の恐れから畏敬の恐れへと変わるには、自然（風景）観が変わることが必要だったのである。個人の修学のためのグランドツアーが流行るようになり、そこでアルプスを見たことが大きなきっかけとなった。その変化はバークの『崇高と美の観念の起原』から、カントが『判断力批判』で美を優美の他に崇高という概念まることを示したことも自然観の変化を示すものであろう。

庭が自然の風景との関連性があることは、幾何学的な自然にない人為的なものを作り出し自然に対抗するという意味でも、自然な田園風景を取り入れるにしても、自然を意識していることに通じていると思われる。

日本語の家庭という言葉は我々の文化と風土（自然）に根差しつつ歴史的に形成されてきたものではないだろうか。

1 庭と家

『新漢語林』によれば、家庭とは「①家の庭②いえ、家族が生活している所。③家族の生活のさま。④（国）、夫婦を中心として家族の生活体。」で「夫婦を中心として家族の生活体」という意味は日本語の意味で中国語にはなく、中国語では家庭を「家」の一字で示す。これは我々の生き方に庭という言葉の意味するものと深い関わりがあるからではないか。

日常的な暮らしの中で、「庭付き一戸建て」の住宅（建物）が求められた時代があり、多くの人が庭などを持ってない今日でも、そのよ

¹² <https://bit.ly/3lnlS80> いかにも深山幽谷の世界を縮図としている。小さな神社（祠）や灯籠のある大石武学流と比べると禅的な美意識が龍安寺と共通して現れているように思われる。歩くことのない橋が置かれている。橋は世俗の此岸と清浄な彼岸を結ぶ象徴で、脱俗への誘いであると思われる。

うな家が求められる傾向は残っている。庭付きの家を求める意識に家庭という言葉のある理由もあるように思われる。校庭とか宮庭という言葉の庭は空間や場所という意味で使われ、そこに池があったり樹木が美的配慮の下に植えられていたりする場という意味ではない。家庭の庭という言葉ももとはそのような場所の意味であったものが歴史を経ることで美的な物となって、ヘーゲルの言う庭の住居化がおこってきたのだと思われる。

ただ、風土的な違いから、俗に煉瓦と石で作られた建物が外と内を隔絶するような西洋の家¹³と外と内をつなぐような木と竹と土で作られた東洋の家との違いからもきているであろう。

住居の部屋という生活空間を美化し心地良い生活の質 (quality of life, QOL) を高めるために飾るインテリアの調度の延長上に庭の草木があるのであろう。最近では建物の外を整えるエクステリアという言葉が使われている¹⁴。古今和歌集にも家の庭に咲く梅や撫子の花などが詠まれた歌が収められている。

庭について、彫刻家イサム・ノグチ (1904—1988) は京都にある代表的な日本庭園を眺め、観察して「ガーデン、それは地球を彫刻すること」という態度で庭を造った。

夏目漱石は美術にも造詣の深かく、『坊ちゃん』ではイギリスの画家・ターナーの名が挙げられ、『草枕』の主人公は画家である。『夢十夜』では「第一夜」で大切な女性を庭に埋

葬し、そこから美しい白い百合の花が生えてくる。墓地ではなく庭であることに意味があるだろう。「第六夜」で、明治の時代に現れた仏師の運慶が護国寺の山門に仁王像を作っている話がある。主人公が運慶の巧みな技を見て感心していると、あれは木材に刻み込むのではなく、木材の中に隠れている仁王を掘り出しているのだと言われる。それで自分でも木を彫ってみたが何も出てこなかった。「明治の木には仁王はいないようだ」と書いている。その他、「裏」という言葉で裏庭を現していると思われ、第一夜も裏庭の可能性がある¹⁵。

イサム・ノグチは日本の風土 (地球) の中に庭を見つけ、掘り起こしたということになる。夏目漱石は若い頃、建築家を目指したことがあり、建物の美にも関心をもっていたことが『三四郎』という作品からも知られる¹⁶。

オイコノミアが対象とする衣食住を総合しているのが、日本の伝統芸術である茶道である。お茶事と呼ばれる茶道の儀礼が行われる建物がお茶室である。母屋の中に茶室が作られる場合もあるが、母屋から独立して作られるのがいわゆる茶室である。そして、お茶室の簡素な建物と対になっているのが露地である。露地は茶室へと客を導く道であり茶庭とも呼ばれる庭である。本格的な茶室には露地は無くてはならないものである。露地には水がたつぷりまかれ清め、道の脇にある灌木の植木の葉まで清められる。町の喧噪と俗塵を離れることから「市中の山居」(町にいながら清浄な山に住むこと) とも呼ばれた。露地に

¹³ A man's [An Englishman's] house is his castle. という言葉は外敵を排除し身を守る意味もある。これは日本の戦国大名・武田信玄の言葉と言われる「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」という、建物で遮って身を守るのではなく、他人を受け入れて身を守ろうとする言葉とは対比されるであろう。あまりに広い堀や高い石垣や塀は、外部との敵対関係や警戒心を予想させるものである。

¹⁴ イン (in) の反対で (out) のように思われるがイクス (ex) である。だから建物の外装に近い概念で、庭を必ずしも意味するものではない。
<https://bit.ly/3rVywwJ>

¹⁵ Back garden 心の内奥の意味があるのではないかと思われる。<https://bit.ly/3vIBsQl>

¹⁶ 『三四郎』第2章「ちょっといい景色でしょう。あの建築の角度のところだけが少し出ている。木のあいだから。ね。いいでしょう。君気がついていませんか。あの建物はなかなかうまくできていますよ。「工科もよくできてるがこのほうがうまいですね」三四郎は野々宮君の鑑賞力に少々驚いた。実をいうと自分にはどっちがいいかまるでわからないのである。そこで今度は三四郎のほうが、はあ、はあと言い出した。」<https://bit.ly/2N8FUpX>

は歩く者を楽しませるように飛び石が道としてしかれている¹⁷。たつぷりと水をまかれた庭の飛び石を島に見立てれば、あたかも島から島へと、海の彼方にあると言われる仙人の住む蓬莱や方丈の島¹⁸へ海を渡る海路を進むことになるであろう。露地はまさに法華経で示す悟りの境地である。茶室は維摩経にある在俗で悟りを開いた維摩詰のいる方丈の狭い空間にあたる。仏教と道教の習合である。浄土への道、茶室への道、茶道である。

このように庭を歩くことは回遊式庭園からの伝統である。回遊式(かいゆうしき)とは、池や築山の周りを、順路を定めて歩きながら鑑賞する方式であり、座観式(ざかんしき)とは、座敷に座って眺めて鑑賞する方式である。しかし、待合という茶室の前で茶の用意が整うのを客たちが座って待つ小さな屋根付きベンチのような所があり、待つ時間にそこで庭を眺めることもできるので、回遊式と言っても座観式の要素がないものはないであろう。庭づくりの古典である作庭記には庭の石や木の選択や配置によって吉凶(幸福や不幸)が決まると書かれている。それによれば、庭が大人から子供まで家族が幸福になるか不幸になるかに関わってくることになる¹⁹。薫陶という言葉があるが、庭の造形が毎日目に入ることによって意識・無意識に心の深層へと影響を与えるのではないか。

¹⁷ 露地口から茶室までの順路には、寄付、中門、待合、雪隠、蹲、灯籠、井泉などが設置されている。それをつないでいるのが飛び石である。飛び石は別名「教(のり)の石」と呼ばれる。宗教的な意味がここにもあることを示している。古語では、「庭」には海上・海面の意味もある。

¹⁸ 蓬莱庭園 臨濟宗 妙心寺派 大池寺
<https://bit.ly/3dl54w2>

¹⁹ 庭に池があることによって周囲の気温が下がったり、湿度が上がったり、身近な環境に変化が生じる。またスギなどアレルギーを引き起こす植物が植えられれば健康に大きな影響を与えることになる。

2 身近な経験の吟味検討

まず公園での出来事、勉学の費用を稼ぐためにしたアルバイトでの経験である。夏の真昼に、公園のトイレの解体の仕事をした。暑くて、臭くて、不潔で、うんざりするような重労働に汗を流していた。すでに疲れて仕事に嫌気がさしてきていた。そんな時、ふと、中学生の頃に習った松尾芭蕉の「しずかさや岩にしみいる蟬の声」だったかと思われる俳句が心の中を横切った。すると爽やかな一陣の風が吹いたような気がした。それで、また仕事(生きる事)を続けることができた。

その時に理解したことは、俳句を含めた詩から彫刻まで、芸術の真実というものは、何らかの共通する普遍性を持ち²⁰、一部の特権的な人の楽しみのためのものでも、価値のあるものを所有する喜びのためにあるものでもなく、自分を含めたすべての人のため、みんなのための心の糧や癒しとして、生きる意味の真実となるためにあるものだということだった。すべての人とは老若男女、大人も子供も、国の内外のすべての人のことでもある。この認識を得たのが、駅やビルのような場所ではなく、公園という庭(場所)であったことも認識に関係があると思われる。公園とは一部の人のための物ではなく、すべての人の憩いのために開かれた庭だからである。

一歳ぐらいの男児を抱いて、有名な弘前公園の夜桜を見に行ったことがある。すると闇の中に雪洞の照明で現れた桜の花を見て、幼児は感嘆の叫びをあげ、花の方へ手をさし伸ばした。綺麗なものを見る喜びと美しいものへの欲求は幼児の中にもあり、美意識は根源的な精神性として人間の中に内在しているようである。しかし、それが教育的な成長と結び付かない単なるエピソードとして終わってしまうのは、幼児が玩具を欲しがっているに

²⁰ 俳句は世界の言語に翻訳され、世界の「ハイク」として世界中で楽しまれ、日本だけのものではなくなってきた。 <https://bit.ly/3di48c4>

すぎない自明なことの延長として、既存の枠組みの中に収められてゆくのではないか。親や教育者はこのような意外性に気付かなければならないであろう。これもただの桜ではなく弘前公園という庭という場所であったことも無関係ではなからう。

小学2年生の女兒と水田の脇の道路を歩いていて、その女兒が夏の日差しに輝き揺れるイネの葉を見て、「金色(きんいろ)のミドリ(緑)」²¹と叫んだ。それまでただの水田があるとしか認識していなかった田圃の風景が、その一瞬、風にそよぐ黄金の輝きを持つ田圃風景に変わった。それがあとでアメリカの詩人ロバート・フロストの詩の言葉と同じ言葉であると知ってもう一度驚かされた。目の前にあるものの真実を掴むことは我々が真に生きる喜びを掴むことになることを小学生に教えられたのである。それは生きる意味を与えるもので「生きる力」と標語にされて記憶されるだけのものとは違うものである。茶道と深いかわりのある禅の偈のような直観に訴える叫びだった²²。しかし、フロストの

²¹ Nature's first green is gold, Her hardest hue to hold. Her early leaf's a flower; But only so an hour. Then leaf subsides to leaf. So Eden sank to grief, So dawn goes down to day. Nothing gold can stay. この詩は、東北女子大学の1986年の文化祭でフランシス・コッポラ監督の映画「アウトサイダー」<https://bit.ly/2ZmA0Uw>が上映され映画の中で知ったものである。映画では広い朝焼けの田圃風景の中で少年がふと口にした詩である。フロストの詩は創世記の天地創造の始まりの美のイメージであろう。<https://bit.ly/3bJPysD> 庭 garden には、楽園や天国を象徴することがあり、創世記のエデンの園(神の庭)を示すこともある。「garden」は、ヘブライ語の「gan(囲まれた)」と「eden(楽園)」を由来とする英単語であると言われる。<https://bit.ly/2ORqJSH>

²² 一人の僧が「如何なるか是れ祖師西来意一達磨大師がインドからはるばる中国へ来られた真意とは何か」と問う。禅(仏教)を伝えるために来たことは自明なはずである。それに対して、趙州和尚は「庭前の柏樹子一庭にある柏の木だ」と叫ぶように答えた。庭とは人間の事であり、柏の木とは人間の中にある真実の意味であると思われる。それを自覚させるために祖師がやって来たという意味であろう。ここにも庭が場として出てくるのが興味深い。

詩にあるように、その感動が更新されなければ、次第に、色あせてゆくのである。

ある中学一年生の男子が雪の降った日に、学校から走って帰って来た。家にいた父親に、「お父さん、お父さん、ものすごいものを見ちゃった。」と言った。父親は「スケッチブックを持って行って描いてこい」と答えた。するとその子供は「ダメだよ」と言った。「じゃあ、カメラを持って行け」と父親は答えた。その子供は「ダメだよ」とまた言った。父親は「どうしてダメなんだ!」と問うた。するとその子供は「風景は一瞬なんだよ」と答えた。父親は絶句した。

大人は、物が形作る風景という物はこういうものだと思い込んで実体的な物として見てしまうが、そのような前提のない子供には時々刻々とその美しさや姿を変える風景の本質がその時、直観的に見えていたのである。「負うた子に教えられる」とはこのことであった。

家族の教育機能は大人から子供へという一方通行だけではなく、パーソンズの言うように相互的なもの(interaction)であることが分かる。ここで学ばれたことは、庭もまた季節や時間そして天候によってその時々でその姿や雰囲気を変え、さまざまな喜びや慰めそして影響を見る者に与えているのである。

九十歳の老婦人から「日月の華、老残を救う」(その時、その時節の花が、年をとってからの慰めとなる)²³という言葉が教えられたことがあった。庭に植えられた花や木を眺め、切り花を花瓶にさして部屋で眺める。茶室の床の間には必ず茶花が飾られる。利休七則に「花は野にあるように」と言われるが、花を自然にあるように活けよということだけでは

²³『黄庭内景経』『肝气章第三十三』『日月之華救老残』黄庭内景経は中国の医学書。<https://bit.ly/38FIZW6> 花など美しいインテリアを整えて病の治癒に向かわせるという方法を昔の人がすでに知っていたということである。高齢社会の家族の健康を考えるためにもなると思われる。

なく、茶室に飾られる茶花が田園（自然）を象徴していることを示していると思われる。道元も「遠山の花を如来に供え」と、心の中に咲く花を供養することを勧めているのである²⁴。遠山は世俗から遠くはなれた深山で、聖なる場所である。畏れる所であって恐ろしい所ではない。経済的な生産から離れ、孤独となった人生に、花に象徴される美はただの快感を与えてくれる飾りだけのものではない。生甲斐を与えてくれるものであり、悩みを克服させてくれ、生きる意味となる真実の観想を可能にさせてくれるのである²⁵。

岡倉天心は「茶の本」の花の章で²⁶、人は、子供が生まれたとき、成人したとき、結婚したとき、花をもって祝い、亡くなったとき、そして亡くなったあとも、花をささげる。人間の誕生から死後に至るまで、花と人間とは

²⁴ 道元「菩提薩埵四摂法」遠い山の花を今ここで供えられることはない、これは心の中の山や花の事であろう。山は聖なる場所である。

²⁵ 笈の小文（おいのこぶみ）「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。」和歌、連歌、絵、茶の美的経験を通じて真理を見つけているのである。加藤信朗によれば、「アリストテレスは人間の生き方において、追求される最高目的を3種（快楽、名誉、観想）に分ち、これらを享楽生活、政治生活、観想生活とよんだ（『ニコマコス倫理学』15）」日本大百科全書（ニッポニカ）<https://bit.ly/3b1TPGe> 最高の目的が真理または神を眺める観想であると言われている。庭にそれを眺めることもできるであろう。

²⁶ 『茶の本』<https://bit.ly/3u7DB7p> 目次を読んだだけでもこの書が大切なことを語っていることが分かるであろう。「第四章 茶室 茶室は茅屋に過ぎない——茶室の簡素純潔——茶室の構造における象徴主義——茶室の装飾法——外界のわずらわしさを遠ざかった聖堂 第五章 芸術鑑賞 美術鑑賞に必要な同情ある心の交通——名人とわれわれの間の内密の默契——暗示の価値——美術の価値はただそれがわれわれに語る程度による——現今の美術に対する表面的の熱狂は真の感じに根拠をおいていない——美術と考古学の混同——われわれは人生の美しいものを破壊することによって美術を破壊している 第六章 花 花はわれらの不断の友——「花の宗匠」——西洋の社会における花の浪費——東洋の花弁栽培——茶の宗匠と生花の法則——生花の方法——花のために花を崇拜すること——生花の宗匠——生花の流派、形式派と写実派」とある。

深い縁があると言っている。この「花」の意味するものは植物の華であるだけでなく、美であり芸術でもある。

3 いわゆるガーデニングの庭には花があるが、日本庭園では花が無いのは何故か。

岡倉天心の言葉を待つまでもなく、日本の芸術文化は古今和歌集、世阿弥の花伝書、華道など、花の文化であると言っても良いほどのものである。しかるに龍安寺の石庭や前述した桂離宮には花がない。弘前市周辺にある大石武学流の庭園にも花を見せようとするところはない。もちろん花壇というものは庭の中に設けられてはいない。日本庭園にはあまり見られず西洋式庭園の整形形式で用いられるようである。また、弘前公園では春は桜祭り²⁷、秋は菊と紅葉祭り²⁸を行う。大輪の菊は市民の作ったもので普段から弘前公園に置かれているものではない。有名な桜の木々は明治以降に公園となってから植えられたもので、植えた桜を抜かれたり折られたり妨害されることなどもありながら苦勞して育てられたものである。古くからあった伝統ではない。植えられている染井吉野の桜は江戸末期に作られた桜である。そこに美しさによる陶冶（教育）によって地域共同体的なものとなり皆に憩いを与え守られるようになったものである。

弘前公園の植物園にはバラ園も花壇も花時計もあり花を飾っている。江戸時代の野本玄道の造った三の丸庭園、六代目を継ぐ現代の外崎亭陽の昭和の大石武学流庭園がある。それらは様式の異なる日本庭園で、規模の違いもあるが、共通性も感じさせるものである²⁹。

²⁷ 弘前桜祭り <https://bit.ly/2LRfFDK>

²⁸ 弘前菊と紅葉の祭り <https://bit.ly/3ak1GQn>

²⁹ <https://bit.ly/3vPb4V0>

<https://bit.ly/2PeNss0> 大石武学流の庭園と比べると野本玄道の庭には橋が無いこと、灯籠もないことに気が付くが、大石武学流の庭園よりも前の時代につくられて浄土式の庭園と枯山水が組み合わされた物であるが、石の使い方などが影響を与えている

これらは伝統的な花でありバラ園や花壇の洋花とは花の種類形態が違うのである。

芸術と遊びには近いものがある。遊びは子供の仕事とも言われるように、子供の生活と成長には欠かせられないものである。そして子供が安全で安心して遊んでいられるような環境と社会的な条件が満たされなければならないといこと件が大前提にされている。そして、我々は子供たちの楽しそうな声を聞いたり遊んだりする姿を見たと心が和み、ウキウキしてくるのである。

後白河法皇の編集した『梁塵秘抄』(治承年間 1180 年頃)に「遊びをせんとや生れけむ、戯(たわむ)れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそ動(ゆる)がるれ」という有名な歌がある。老人が安心して暮らし、子供が楽しく学び遊ぶ姿は世の中が上手く治まり平和であることを象徴するものである³⁰。中国の古い故事に老人が道端で腹を敲き棒で地面を打ち拍子を取りながら歌を歌っていた。それを示すのが「鼓腹撃壤」という諺である³¹。

江戸時代の画家の丸山応挙(1733-1795)には郭子儀図襖(かくしぎずふすま)という作品がある³²。襖には、庭にいる老人の郭子儀とそのそばで芭蕉の葉を取って、紙の代わりに文字を書いたのびのびと遊ぶ子供たちの姿が描かれている。子供においては遊

ぶことと学ぶことが通じ合っているのである³³。郭子儀は、中国の盛唐の時代の朝廷に仕えた軍人・政治家で、安史の乱を治め平和をもたらした歴史上の人物だった。人格円満で多くの人に愛された英雄である。

これら二面の襖は部屋の角で直角に交わっている。部屋で絵を見る人は、部屋の二面によって挟まれて作り出された空間(場・庭)の中に入り、部屋の中において理想郷にいるような気分になる。絵の中の庭と見る者の場がつながり連続するのである。



丸山応挙 郭子儀図襖 右 大乘寺蔵



丸山応挙 郭子儀図襖 左 大乘寺蔵

人間とは何か、アリストテレスが彼の生きていた現実に即して、人間はポリス的な存在であると、社会の分業は互いに他者の存在を前提にしている。アリストテレスに従えば、人間は個人だけで生きられる存在ではないのである。家族も地域の共同体の人々が互いに思いやり助け合ってこそ人間らしく生きられるのである。都市国家間の交流や外国との交易によって、今日にも通じる人種や民族にかかわりのない普遍的な人間観が形成されたように思われる。

ように思われる。橋が無いのは、ここが彼岸の浄土だという意味であろう。橋があるのは此岸と彼岸の緊張を与え、庭にアクセントを作っているものと思われる。

³⁰ 秦恒平『梁塵秘抄』昭和53年p141

³¹ 十八史略に「日出でて作(しごと)し、日入りて息(やすら)う。「井を鑿(うが)ちて飲み、田を耕(たがや)して食う。帝力(おかみのちから)が何(どうして)我に有(かかわりがあ)ろうか」と。意味は、庶民の生活の中に国王などの権力者の暴力的な権力が介入し、財産を調達されたり、労役に駆り立てられたり、戦争を起し兵隊として家族を奪われたりすることがない、つまり、権力者を意識しないで自由に暮らせるという意味である。

³² <https://bit.ly/3s1Wrv0>

³³ All work and no play makes Jack a dull boy.遊びは人間形成に大きな意味のあることを示している。

4 まとめとして、瑞楽園の庭 生きることは、作ること、楽しむことのオイコノミア



瑞楽園³⁴ 中央左に橋がある



35

庭略図 実際のものとは少し異なる。

写真と図を読み解く、写真は弘前市にある瑞楽園の建物の座敷から庭を眺めたものである。右から中央に向けて飛び石があり、黒っぽい少し大きな石が礼拝石と呼ばれる。礼拝する対象は石に象徴される神仏である。礼拝する（祈る）ことによって家に恵みが来るようにするのである。画面の中央に頭位松という松がある。松の後ろに守護石（深山石）という大きな石が立てられている。庭の規模に比べて大きな石が目立つが、大きな石への信仰があるように思われ、それが大石武学流の大石の由来ではないかと思われる。その左隣に石の仏塔が置かれている。松と礼拝石の間に黒い玉石の敷かれた水のない枯れ川と池がある。陰陽五行説では水は黒の色で示される。川には石の橋が架かっている。右の窓枠の上の中に人工的に加工した春日灯籠が一基あり

頭位松の右と左に自然石を重ねた野夜灯（やどろ・化け灯籠）と呼ばれる灯籠が三基ある。右下の窓枠の右上端に蹲踞（つくばい）がある。春日灯籠の向こうに小さなお社（神社）がある。

窓枠から眺める時、座観式庭園であることが分かるが、窓枠が絵画の額縁の役割を果たし、絵を見ているようなことになる。頭位松は「というまつ」ではなく「ずいしょう」と読むとガイドの方に説明をうける。つまりめでたい印である瑞祥に掛けているのである³⁶。野夜灯の火袋の明かり窓は○とㇿになっていて陰と陽の対になっている。ㇿの方が家の方を向いている。これは○とㇿが庚申塔などの石に彫られる青面金剛または猿田彦の背後に太陽と月があることで庚申信仰に共通する。庚申信仰では夜寝ないで起きていることから、酒宴を催すことなども行われ遊びの要素があったはずである。地域の人々のリクリエーションの集まりとなったものではないか。庚申の日を十干十二支で計算するので六十日に一回の割でやってくる。暗い庭の中で月の形の小さな窓から揺らめく明かりは神秘的であると共に不気味である。その不気味さが化け灯籠の名の由来ではないだろうか。神仏分離令や廃仏毀釈運動があった後にも仏塔と神社のあることから伝統的な神仏習合が残っていることが分かる。ここに多様なものを受け入れ共存させる思想も読み取れるのではないか。

大石武学流の瑞楽園の歴史については、弘前市教育委員会文化財課によれば「藩政時代に代々高杉組の庄屋をつとめていた豪農對馬家の庭園で、明治23年（1890年）春から38年（1905年）秋まで15年の歳月をかけて、

³⁴ <https://bit.ly/37j4wmL> この縁側の右側に丸窓があり岩木山がその中に入る。

³⁵ <https://bit.ly/3ppnJJu> 瑞楽園の母屋の床の間に掛けられている。

³⁶ 弘前市には揚亀園（ようきえん）という名の大石武学流の庭園があるが、その命名は風水思想に基づき城の北に亀甲門（北門・玄武門）が置かれ、それにちなんだ亀甲町の名ができたのである。亀がいたという意味ではない。亀が水から揚がって来たというよりも（ようき）をおめでたい陽気に掛けているように思われる。

当時津軽地方で庭造りの第一人者であった大石武学流三代高橋亭山により改庭され、さらにその後、昭和3年から11年(1928~36年)にかけて、亭山の高弟であった池田亭月とその弟子であった外崎亭陽により増庭されたものである。即ち、瑞樂園の西の部分は、高橋亭山の作庭であり、庭の中央部から東の部分は池田亭月とその弟子であった外崎亭陽により増庭されたものである。」³⁷とある。この説明にはないが庭内に大きな石を冬場に檣に乗せて地域の多くの人が周辺の山から運んでいる絵が掲げられている。それは農民にとっては冬場の収入源になったという。福祉事業であるともいわれる。なぜ、造園に15年もかけ、さらに改庭に11年もかけたのであろうか。それだけの目に見えない手間ひまがかかっているのである。植えた木が根付くのを待っていたり、庭の景気にふさわしくない木の植え替えをしたり、剪定していたのではないかと思われる。筆者は、瑞樂園の松に、この広重の浮世絵のような枝が輪を巻いているのを見た記憶がある。庭を作りながら輪ができる時間を待っていたのかもしれない。輪の向こうに岩木山が見える。また、庭に月のイメージを与えるためであったのかもしれない。母屋の正面からは見えないが亭からは見ることができたように思う。イサム・ノグチが言うように庭は彫刻と同じく立体なのである。



歌川広重『名所江戸百景 上野山内月のまつ』

今日のような土木建築のための機械器具が無かったために人力で木や石を運ぶのに時間

がかかったことは推測できるが、さらに、庭作りに関わる村の共同体の人々が雪の上を檣で大きな石を運ぶ絵が、大きな石を運ぶ時期が限定されていることを教えている。造園に従事できる時期が農閑期であることも条件となったであろう。

しかし、前述したように、庭の風景というものが季節、時間、天候によって変化することが石の位置や場所の選定に関わる。木の剪定は華道の生け花にも通じるであろう。

庭師が縁側から庭をじっと眺めて一日過ごすことが、外から見れば何もしないように見えるが、アリストテレスの言うように観想をしているのである。観想は真善美との対話であり、真善美である神仏への祈りにも通じるものである。子供の育つのを見ているように庭が育つのを見ているのである。庭を様式という型に合わせて作ればそれで良いのではない。庭の風景を眺め、庭と対話したことが長くかかった理由ではないだろうか。

参考文献

- 大石武学流 庭園めぐりガイドブック 弘前市・黒石市・平川市
青森草子239号 津軽の庭園 大石武学流雑誌 - 2016/8/1
岡倉 覚三『茶の本』(著), 村岡 博(翻訳)岩波文庫 1961/6/5
作庭記 <https://bit.ly/2NFDUpw>
野上豊一郎「桂離宮」青空文庫
<https://bit.ly/3c4cEtX>
大石武学流庭園
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/jouhou/koho/kouhou/r020501_04-05.pdf
清藤氏書院庭園
<https://garden-guide.jp/spot.php?i=seidoshi>
<https://bit.ly/3qQaW3A>

³⁷ <https://bit.ly/37lwn5U>